

1978 (昭和53年)

会員数64名

27代理事長

佐々木則夫



1978年、この年は、高度成長期の繁栄の時代から、オイルショック以降円高不況に続く模索する時代に入り、かつてない長期不況という経済予測がなされていた年であった。このような経済環境のなかで第27代佐々木則夫理事長ひきいる八幡浜青年会議所の活動が始まった。

1月18日の定時総会において理事長の運営基本方針が発表された。それは次のようなものであった。

【この混沌として、今後の見極めさえつかぬ経済情勢の折から「JCと企業」という問題が例年以上にクローズアップされる時ではないかと考える。当然のことながら、自己の企業のために最大の時間と努力をはらうべきであろう。しかしながら、ただ単に自己の企業と家庭のみにとらわれず広く地域社会をも考え、そして、それを通して各自の訓練とみなし、大きな人間性成長のため基礎となすこと、これこそ、JC活動の中に存在する基本的性格であるとする】

まさに情勢に即した的を得た運営基本方針であった。重点事業として「八幡浜みなと祭の推進」、今年度30周年を迎える八幡浜みなと祭りを積極的に推進し、子供たちにふるさとを植えつけ、地域の人々の心のふれあいの存在する祭の真髄をみなと祭の中に見出すべく全員の協力のもとでこれに取り組む。

いま一つは、「八幡浜児童合唱団の育成」、これは「歌声の聞える心豊かな街づくり」を目的として結成され、本年度で5周年を迎えるこの団を着実に発展させる為の素地をつくり、一人でも多くの人々にこの歌声をとどけ、ひいては地域文化の向上に結びつく事を意図したものであった。

こうして、最重点事業である10月18日・19日・20日に開催予定の第30回八幡浜みなとまつりを明日への素晴らしい「まつり」づくりの第一歩とすべく、全会員一丸となった行動実践が開始された。

1月より祭アンケートの設問づくりに入り、2月末に72の設問からなるアンケートが完成した。これを併行して600名の調査対象市民の抽出作業が連夜に亘り実施され、3月6日より全会員がアンケート調査用紙を片手に市内を駆け廻り一軒一軒訪問、調査を実施した。絶大な協力と会員の努力が実り100%の回収を達成する事ができた。このアンケートは3月末迄にコンピューターで正確に集計され、これらのデータを分析・検討して6月30日やと一冊の報告書として発刊を見ることができた。その後も必死の準備が続けられ10月19日を迎えた。全会員の協力のもと、想像を絶する人出を得、その参加者及び多くの市民から絶賛された。また「一円運だめし」「競豚ダービー」「オークション」等々の独創的な企画は、子供たちに祭りの楽しさと、大きな夢を与えた。

更に第2の重点事業、12月24日の第5回児童合唱団定期演奏会も成功裡に終わり、ここに佐々木理事長の掲げた重点

目標が実を結んだのである。



10月19日おまつり村風景



「みなとまつり」づくり(六〇〇名調査対象市民の抽出作業)



8月26日LD道場(於・出石寺)

1979 (昭和54年)

会員数62名

28代理事長

伊藤禮司



70年代の幕引きの年であり、80年代への橋渡しの年となった1979年、八幡浜青年会議所28年目の歴史を築き上げる為、伊藤礼司理事長のもと明るい豊かな町づくりを基本理念とした活動が開始された。

1月1日新年合同祝賀会の主催者挨拶の中で次なる四つの事業所信が伊藤理事長によって表明された。

一、会員の拡大と個の資質の向上。
一、個性あるニュー・コミュニティづくりの為の530運動の推進。

一、明日へのまちづくり事業の継続実践。

一、八幡浜児童合唱団の将来への基盤づくり。

以上、四つの運動を重点事業として八幡浜青年会議所の可能性への追及が展開された。



5月30日八幡浜530運動推進連絡会結成大会(於・総合福祉文化センター2階ホール)

「会員の拡大と個の資質の向上」は、会員開発が担当し9名の有能な新入会員を得、目標を達成すると共に、会員オリエンテーション・LD道場・経営セミナー等を開催して会員の資質向上に役立った。「530運動の推進」は本年が今事業の初年度にもかかわらず、市内各種団体、事業所等百数十名の構成で八幡浜530運動推進連絡会を発足させることができ、更には、ステッカー等のPR作戦や530推進事業の実施が功を奏し、小中学生を始め市内に530の輪が大きく広がっていった。

「明日へのまちづくり事業」は昨年度に引き続き主管開催する「お祭り村」が素晴らしい企画による会員の情熱と努力が実り、当日4万人余の人出を見、大盛況裡で幕を閉じることができた。又もう一つの近い将来目指すべき祭と想定した「みなと龍王まつり実施計画書の作成」は連夜の会議で明日へつなぐ祭づくりとしての骨子を完成させることができた。

「八幡浜児童合唱団の育成」は青少年開発室が担当し毎週土曜日の通常練習や夏季強化合宿等には常に会員が参加し団育成に努めた。これら4つの重点事業のほかにも、当JCメンバー菊池住幸氏の著になる郷土史談「石は語る」の発刊、会員募集に関するマニュアル作り、献血事業、八青協事業等々を展開。又、当JC始まって以来、初めて挑戦した日本JC褒賞申請において八幡浜児童合唱団事業が見事自由

テーマ賞優秀賞の栄に輝いた事もこの年の大きな収穫であった。

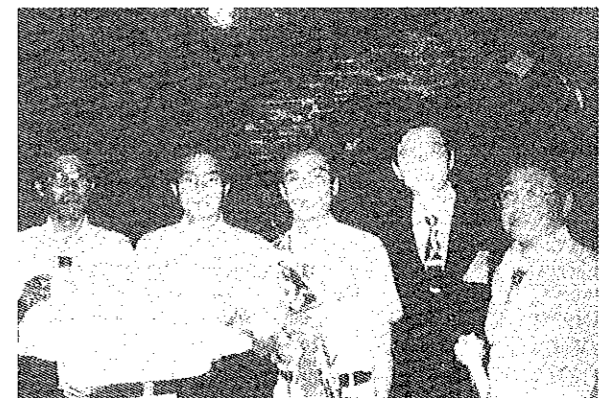
更に11月例会には、日本JC長谷川副会頭の来訪も実現し素晴らしいリーダーとの語らいの場を得た。このようにして実り豊かな1979年、70年代の幕をりっぱに下ろす事ができた。



9月21日第21回日本青年海外派遣団 欧州第一班・大本宗司君壮行会



国際児童年にちなんで二宮忠八翁記念飛行大会の優勝グラウンド・トロフィー 2基市へ寄贈



10月7日日本JC褒賞をうけた当JC一行(第28回沖繩全国会員大会)日本JC井奥会頭の祝福を受ける



3月6・7日一日消防職員体験入隊